

作家名	きくちまたお	作品名	めのこ		
	菊地又男		メノコ		
	KIKUCHI, Matao				
生没年	1916-2001	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	1946年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	53.1×45.4cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F10	評価額	250,000 円

作家略歴

1916年北海道札幌市生まれ。1935年北海中学校(現・北海高等学校)卒業。兄・菊地精二に絵画の手ほどきを受け、1933年16歳で北海道美術協会展(道展)に入選した後、1937年に独立美術協会展に入選。北海道ではかなり早い時期から抽象絵画に取り組む。道展、全道美術協会(全道展)の会友に推薦されながらも退会し、1940年代から50年代中頃にかけては1940年に北展美術協会、1946年に北海道アンデパンダン美術連盟、1953年にゼロ美術同人会、1956年に新北海道美術協会(新道展)などの美術団体の創立とそこからの離脱を繰り返す。1959年頃から絵具だけに留まらない新たな素材による調和を求め、画面にさまざまなものを貼り付けるコラージュ作品を、油彩画とあわせて制作。「異端と反骨」を信条としながら、保守的な権威主義に抵抗する前衛的な活動を展開した。1998年菊地又男展(芸術の森美術館)開催。2001年没。

特徴

本作はアイヌ民族の女性を描いたもの。伏し目がちな表情と、褐色を中心に構成された色彩の構成は、深沈とした雰囲気漂わせる。当館で所蔵している《婦人像》(1942年)、および《婦人像》(1946年)と比べると、色彩的には共通するが、本作はより写実的に描かれている部分が異なる。1946年、11月18日から23日にかけて、札幌・丸井今井百貨店で開かれた第1回全道美術展(全道展)の出品作(《黎明》とあわせて2点出品)。最高賞である全道美術協会賞を受賞し、会友に推薦されるもこの後全道展には出品していない。菊地は、活動の初期から抽象表現に傾倒し、のちに展開されるコラージュ作品を含め、生涯を通じて抽象作品が多い。活動初期より1942年頃までその傾向は続くが、戦争が激化するにつれ、物資の不足や思想統制、前衛的な作品に対する絵具の不支給などの時代背景もあってか、終戦を迎えしばらく経つまでの数年間、具象的傾向の作品が続いている。本作はその中に位置づけられる作品。

作家名	きくちまたお	作品名	ましゅうこのはる		
	菊地又男		摩周湖の春		
	KIKUCHI, Matao				
生没年	1916－2001	作品名 補足			
出生地	北海道札幌市	制作年	1948 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	38.0×45.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F8	評価額	200,000 円

作家略歴

1916年北海道札幌市生まれ。1935年北海中学校(現・北海高等学校)卒業。兄・菊地精二に絵画の手ほどきを受け、1933年16歳で北海道美術協会展(道展)に入選した後、1937年に独立美術協会展に入選。北海道ではかなり早い時期から抽象絵画に取り組む。道展、全道美術協会(全道展)の会友に推薦されながらも退会し、1940年代から50年代中頃にかけては1940年に北展美術協会、1946年に北海道アンデパンダン美術連盟、1953年にゼロ美術同人会、1956年に新北海道美術協会(新道展)などの美術団体の創立とそこからの離脱を繰り返す。1959年頃から絵具だけに留まらない新たな素材による調和を求め、画面にさまざまなものを貼り付けるコラージュ作品を、油彩画とあわせて制作。「異端と反骨」を信条としながら、保守的な権威主義に抵抗する前衛的な活動を展開した。1998年菊地又男展(芸術の森美術館)開催。2001年没。

特徴

本作は摩周湖の風景を描いたもの。画面中央付近にカムイヌプリとみられる小島があり、画面右側にはカムイヌプリ(摩周岳)とみられる山があることから、現在の摩周湖第一展望台付近からの風景を描いたものと思われる。空と湖面は黄味がかった明るい色、山々や小島、湖面の前景は緑を中心とした深く暗い色で描き、ツートーン的な色彩構成となっており、また深い色で走り描きのように画面右下前景に描かれた蔓性の植物が、動きを与えている。1946年に北海高等学校の美術教諭を辞した後、生計を立てるために道内各地を写生しながら回り、小品の風景画を描いていた。初期の活動を特徴づけるものであり、また単純化された山々や植物、色面として捉えられた湖面など、抽象的に描かれた要素もありその後の作品への影響がみられる。当館では既に15点(油彩14点、水彩1点)の菊地又男作品を所蔵しており、本作と同様に具体的な場所をモチーフとしたものは晩年の抽象的傾向が強い作品《知床断崖》(1989年)がある。

作家名	すなだともじ	作品名	よぶ		
	砂田友治		呼ぶ		
	SUNADA, Tomoji				
生没年	1916-1999	作品名 補足			
出生地	北海道苫小牧村(現・苫小牧市)	制作年	1960年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	130.0×91.7cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和4年度	エディション			
		号数	P60	評価額	1,300,000 円

作家略歴

1916年、北海道苫小牧市生まれ。東京高等師範学校(現・筑波大学)を卒業後、北海道第一師範学校(現・北海道教育大学札幌校)、北海道学芸大学岩見沢分校(現・北海道教育大学岩見沢校)、文化女子大学室蘭短期大学などで教鞭をとりつつ、独立美術協会(独立展)、全道美術協会(全道展)を舞台に活躍。「北海道秀作美術展」、「北海道の美術」展といった道内の選抜展でも出品・受賞を重ね、「玄の会」のメンバー(ほかに、伊藤将夫、亀山良雄、小谷博貞、坂坦道、栃内忠男、本田明二)として出品を続けるなど、戦後の北海道美術界に大きな足跡を残した。初期の風景や静物を経て人物群像に取り組むようになり、1960年代から70年代を通じて漁夫、男女、家族などをモチーフに単純化した形態と大胆な色彩による力強い作風を確立。その後、自己の原風景である勇払原野のイメージを背景に、大地と人間が織りなす生命賛歌の世界を展開する。80年代後半以降は、アダムとイヴ、十字架磔刑、太陽などモチーフを広げ、より大きなスケールで人間の苦悩や歓びの根源を探究した。1999年没。

特徴

深い赤を背景に、一人の人物が両手を口元にあて、だれかを呼ぶために声を発しているかのように描かれている。初期の作品は静物や風景などを主題に写実的に描いていたが、1960年には動きの一瞬をとらえた人物表現、絵の具の盛り上がりによる画面の凹凸が顕著となる。本作を出品した第15回全道展の目録に、砂田は「どうしても具象という部分だけ弱まらないだろうか。強い形、冴えた色がほしい」と文章を寄せており、抽象表現への関心がかうかがえる。激しい赤を対比的に強調する色彩構成は、1960年代半ばから取り組んだ「北海の男たち」シリーズにもつながるものであるとともに、60年代の美術動向や時代の空気を反映させたものともいえる。

作家名	すなだともじ	作品名	ふねとおとこ		
	砂田友治		船と男		
	SUNADA, Tomoji				
生没年	1916-1999	作品名 補足			
出生地	北海道苫小牧村(現・苫小牧市)	制作年	1970年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	129.5×161.4cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和4年度	エディション			
		号数	F100	評価額	1,800,000 円

作家略歴

1916年、北海道苫小牧市生まれ。東京高等師範学校(現・筑波大学)を卒業後、北海道第一師範学校(現・北海道教育大学札幌校)、北海道学芸大学岩見沢分校(現・北海道教育大学岩見沢校)、文化女子大学室蘭短期大学などで教鞭をとりつつ、独立美術協会(独立展)、全道美術協会(全道展)を舞台に活躍。「北海道秀作美術展」、「北海道の美術」展といった道内の選抜展でも出品・受賞を重ね、「玄の会」のメンバー(ほかに、伊藤将夫、亀山良雄、小谷博貞、坂坦道、栃内忠男、本田明二)として出品を続けるなど、戦後の北海道美術界に大きな足跡を残した。初期の風景や静物を経て人物群像に取り組むようになり、1960年代から70年代を通じて漁夫、男女、家族などをモチーフに単純化した形態と大胆な色彩による力強い作風を確立。その後、自己の原風景である勇払原野のイメージを背景に、大地と人間が織りなす生命賛歌の世界を展開する。80年代後半以降は、アダムとイヴ、十字架磔刑、太陽などモチーフを広げ、より大きなスケールで人間の苦悩や歓びの根源を探究した。1999年没。

特徴

船上で繰り広げられる人間模様を多彩な色で表現した作品。1960年代半ばに、北の海で過酷な自然環境に挑む漁夫の姿を、赤と青の対比によって痛烈にとらえていたが、1960年代末から70年代にかけて、漁夫に端を発した男性一般、人間そのものへと目を向け、色とりどりに表現している。ここではテーマを深めるというよりも、新しい表現を模索するうえでの造形的関心が、群像表現の展開を推し進めていたようだ。この人間全般へのまなざしは、その後1975年頃から描かれる「王と王妃」シリーズにつながる。当館所蔵の《母子像》(1976年)は同シリーズの代表作であり、本作の収蔵によって、砂田作品のコレクションの充実を図ることができる。

作家名	すなだともじ	作品名	みずにおうげんや しつげん		
	砂田友治		水匂う原野(湿原)		
	SUNADA, Tomoji				
生没年	1916-1999				
出生地	北海道苫小牧村(現・苫小牧市)	作品名 補足			
No Image		制作年	1984 年		
		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	162.3×194.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F130	評価額	2,300,000 円

作家略歴

1916年、北海道苫小牧市生まれ。東京高等師範学校(現・筑波大学)を卒業後、北海道第一師範学校(現・北海道教育大学札幌校)、北海道学芸大学岩見沢分校(現・北海道教育大学岩見沢校)、文化女子大学室蘭短期大学などで教鞭をとりつつ、独立美術協会(独立展)、全道美術協会(全道展)を舞台に活躍。「北海道秀作美術展」、「北海道の美術」展といった道内の選抜展でも出品・受賞を重ね、「玄の会」のメンバー(ほかに、伊藤将夫、亀山良雄、小谷博貞、坂坦道、栃内忠男、本田明二)として出品を続けるなど、戦後の北海道美術界に大きな足跡を残した。初期の風景や静物を経て人物群像に取り組むようになり、1960年代から70年代を通じて漁夫、男女、家族などをモチーフに単純化した形態と大胆な色彩による力強い作風を確立。その後、自己の原風景である勇払原野のイメージを背景に、大地と人間が織りなす生命賛歌の世界を展開する。80年代後半以降は、アダムとイヴ、十字架磔刑、太陽などモチーフを広げ、より大きなスケールで人間の苦悩や歓びの根源を探究した。1999年没。

特徴

1980年代から、これまで取り組んできた群像表現の背後に出身地・苫小牧の勇払原野が、背景として現れる。明快な地平線が設定され、画面中央に描かれた人物は単純化した線で力強く描写されている。それまで人物表現に注力し、人間全般をどのように表現するか腐心してきたが、人間のみならず、人間をとりまく自然、自然の中における人間のありようへと関心を移してきた様子がうかがえる。

作家名	すなだともじ	作品名	てんしうちゅうにまう		
	砂田友治		天使宇宙に舞う		
	SUNADA, Tomoji				
生没年	1916-1999	作品名 補足			
出生地	北海道苫小牧村(現・苫小牧市)	制作年	1999 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	194.3×227.6cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和4年度	エディション			
		号数	F200	評価額	3,000,000 円

作家略歴

1916年、北海道苫小牧市生まれ。東京高等師範学校(現・筑波大学)を卒業後、北海道第一師範学校(現・北海道教育大学札幌校)、北海道学芸大学岩見沢分校(現・北海道教育大学岩見沢校)、文化女子大学室蘭短期大学などで教鞭をとりつつ、独立美術協会(独立展)、全道美術協会(全道展)を舞台に活躍。「北海道秀作美術展」、「北海道の美術」展といった道内の選抜展でも出品・受賞を重ね、「玄の会」のメンバー(ほかに、伊藤将夫、亀山良雄、小谷博貞、坂坦道、栃内忠男、本田明二)として出品を続けるなど、戦後の北海道美術界に大きな足跡を残した。初期の風景や静物を経て人物群像に取り組むようになり、1960年代から70年代を通じて漁夫、男女、家族などをモチーフに単純化した形態と大胆な色彩による力強い作風を確立。その後、自己の原風景である勇払原野のイメージを背景に、大地と人間が織りなす生命賛歌の世界を展開する。80年代後半以降は、アダムとイヴ、十字架磔刑、太陽などモチーフを広げ、より大きなスケールで人間の苦悩や歓びの根源を探究した。1999年没。

特徴

最晩年、画面に天使が登場するようになり、より力強い直線で明快に画面が構成されるようになる。天上へと舞い上っていくかのような天使たちの軽やかな動きは、華やかな色彩も相まって、明るい高揚感を与える。当館で収蔵している《人物構成》(1996年)と比較すると、グレーの輪郭線は共通するものの、より単純化された形態を取り入れ、モチーフの組み合わせによって画面を構成する志向が強くなっている。絶筆。

作家名	たけおかようこ	作品名	りは一さる・えとせとら		
	竹岡羊子		Rehearsal etc.		
	TAKEOKA, Yoko				
生没年	1931-	作品名 補足			
出生地	福岡県太宰府市	制作年	1988 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	193.9×258.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F200	評価額	3,200,000 円

作家略歴

1931年、福岡県太宰府市生まれ。1955年、札幌に移り住み、以降画家として活動。独立美術協会(独立展)、女流画家協会展、全道美術協会(全道展)各会員。1967年からヨーロッパの祝祭をテーマとした作品に着手し、現在に至るまで50余年カーニバルを描くことをライフワークにしている。1970年、《CARNAVAL =クラウン》にて女流画家協会賞、H夫人賞を受賞。独立展では独立賞(1984年、1986年)を二度受賞。2011年に「竹岡羊子展ーカーニバル〜虚構の宴に魅せられて」(札幌芸術の森美術館)開催、同年札幌芸術賞受賞。イタリア、スイス、フランスなどヨーロッパを中心に様々なカーニバルに足を運び、祝祭の様子やその周囲の人間模様を色彩豊かに表現した作品を生み出し続けている。

特徴

バーゼルのカーニバル、ファスナハットに取材。深い緑や赤が多用された画面には、土俗的な仮装に身をつつみ、笛や太鼓を演奏しながら練り歩く、パレードの様子が描かれる。1970年代～1980年代前半にも同地に取材した作品を制作し、当館でも《夜のパレード》(1980年)を収蔵しているが、そのころはパレードに主眼が置かれ、列をなす群衆の華やいだ揺らめきを淡い色調でとらえていた。しかし本作を含む1980年代後半の作品群は、パレードを構成する一人一人に関心が向けられ、カーニバルの賑わいととも、この地のカーニバルの特徴の一つである風刺をこめた仮装が示す異様な不気味さが際立っている。第56回独立展出品作品。

作家名	たけおかようこ	作品名	きねんざつえい…それから		
	竹岡羊子		記念撮影…それから		
	TAKEOKA, Yoko				
生没年	1931-	作品名 補足			
出生地	福岡県太宰府市	制作年	1999 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	193.9×258.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F200	評価額	3,200,000 円

作家略歴

1931年、福岡県太宰府市生まれ。1955年、札幌に移り住み、以降画家として活動。独立美術協会(独立展)、女流画家協会展、全道美術協会(全道展)各会員。1967年からヨーロッパの祝祭をテーマとした作品に着手し、現在に至るまで50余年カーニバルを描くことをライフワークにしている。1970年、《CARNAVAL =クラウン》にて女流画家協会賞、H夫人賞を受賞。独立展では独立賞(1984年、1986年)を二度受賞。2011年に「竹岡羊子展ーカーニバル～虚構の宴に魅せられて」(札幌芸術の森美術館)開催、同年札幌芸術賞受賞。イタリア、スイス、フランスなどヨーロッパを中心に様々なカーニバルに足を運び、祝祭の様子やその周囲の人間模様を色彩豊かに表現した作品を生み出し続けている。

特徴

ヴェネツィアのカーニバルに取材。カーニバルの衣装に身を包んだ人々が肩を寄せ合い、それぞれにポーズをとっている。その様子はカーニバルの期間中に街中で繰り広げられる記念撮影であることを、画面右上に描かれたカメラと三脚が示唆している。画面手前の赤い衣装の子供はヴェネツィアの象徴である有翼の獅子にまたがり、その背後の人物が子供の肩に手を添える様子から親密さがうかがえる。当館ではすでに竹岡の作品を9点(油彩8点、版画1点)収蔵しているが、ヴェネツィアに取材した作品は今年度が初収蔵となる。第67回独立展出品作品。

作家名	たけおかようこ	作品名	きらめく きんまるこ		
	竹岡羊子		燦めく サンマルコ		
	TAKEOKA, Yoko				
生没年	1931-	作品名 補足			
出生地	福岡県太宰府市	制作年	2009 年		
No Image		技法 材質	油彩、キャンヴァス		
		寸法	193.9×258.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	F200	評価額	3,200,000 円

作家略歴

1931年、福岡県太宰府市生まれ。1955年、札幌に移り住み、以降画家として活動。独立展、女流画家協会展、全道展各会員。1967年からヨーロッパの祝祭をテーマとした作品に着手し、現在に至るまで50余年カーニバルを描くことをライフワークにしている。1970年、《CARNAVAL =クラウン》にて女流画家協会賞、H夫人賞を受賞。独立展では独立賞(1984年、1986年)を二度受賞。2011年札幌芸術の森美術館にて「竹岡羊子展ーカーニバル〜虚構の宴に魅せられて」開催、同年札幌芸術賞受賞。イタリア、スイス、フランスなどヨーロッパを中心に様々なカーニバルに足を運び、祝祭の様子やその周囲の人間模様を色彩豊かに表現した作品を生み出し続けている。

特徴

ヴェネツィアのカーニバルに取材。サン・マルコ広場でのカーニバルに参加する仮装した人々が街中の灯りとともに幻想的に描かれる。画面手前にはヴェネツィアの象徴である有翼の獅子、その背後には木の杭が林立する船着き場が描かれ、石造りの壁やアーチとともに、ヴェネツィアを表すモチーフが配されている。竹岡はヨーロッパ各地のカーニバルを描いてきたが、特にヴェネツィアの場合は建造物などをしっかりと描いており、カーニバルの舞台となる街全体にも高い関心を示している。当館ではすでに竹岡の作品を9点(油彩8点、版画1点)収蔵しているが、ヴェネツィアに取材した作品は今年度が初収蔵となる。第77回独立展出品。

作家名	ばく・かんぎゆる	作品名	めもりー おぶ さ すぺーす		
	朴光烈		Memory of the Space		
	PARK, Kwangyul				
生没年	1955-	作品名 補足			
出生地	韓国	制作年	1993 年		
No Image		技法 材質	ミクストメディア		
		寸法	75.3×54.5×2.5cm		
取得方法	寄贈	エディション	A.P.		
選定年度	令和4年度	号数		評価額	200,000 円

作家略歴

1955年韓国生まれ。1984年世宗大学卒業、1988年多摩美術大学大学院修了。秋渓芸術大学教授。大学卒業年の1984年頃よりソウルで個展を開催するなど活動を始め、多摩美術大学大学院在籍時は東京での個展歴を有する。その後1990年の「プリント・アドベンチャー」(北海道立近代美術館)出品をきっかけに、北海道での展覧会が多くなり、テンポラリースペース(札幌)、ギャラリーシーズ(旭川)での個展の他、「ソウル-札幌展」、「水脈の肖像」といった国際交流展に継続して出品。「水脈の肖像」では、実行委員を務めた。韓国国内の他、名古屋、福岡、長野、ドイツ、ロシアなどでのグループ展に出品。版画を中心とするが、その活動は平面作品に留まらず、コラージュ的な立体版画や、紙を用いたインスタレーションなど、版の概念を拡張するような試みを展開。

特徴

「Memory of the space」は80年代後半より続く朴の作品のシリーズ。1989年の作例など最初期は、エッチングやアクアチントなど銅版画技法で制作されていたが、次第に型取りした紙や、サンドブラストを施したガラス、感光液を塗って露光し印刷するガムプリント、紙を錆びさせるなど、様々な素材や技法を駆使し、平面作品という形式をも拡張するように、その概念を拡張させてきた。本作は砂粒のようなメディウムを用い、ざらざらとしたテクスチャーで構成された画面、その中央には画面から飛び出すように厚みを持って矩形の樹脂が貼り付けられている。樹脂は半透明だが内部は見づらく、バラの棘のようなものがついた棒、さらにその奥に「PARCEL POST」と記された札が見える。樹脂部分には紐で縛ったような跡も型取られており、小包の荷物を模している。本作より前の同シリーズの銅版の作例では、イメージに手形が取り入れられ、人の手という痕跡が象徴的に表現されている。小包もまた誰かの手から誰かの手へと送られるものであり、そうした生活の痕跡を象徴している。

作家名	ばく・かんぎゅる	作品名	めもりー おぶ さ すべーす あ ぼりーど すとーりー		
	朴光烈		Memory of the Space-A buried story		
	PARK, Kwangyul				
生没年	1955-				
出生地	韓国	作品名 補足			
No Image		制作年	2005 年		
		技法 材質	手漉き紙によるキャストイング、スタンプ		
		寸法	106.5×56.5×2.5cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数		評価額	250,000 円

作家略歴

1955年韓国生まれ。1984年世宗大学卒業、1988年多摩美術大学大学院修了。秋渓芸術大学教授。大学卒業年の1984年頃よりソウルで個展を開催するなど活動を始め、多摩美術大学大学院在籍時は東京での個展歴を有する。その後1990年の「プリント・アドベンチャー」(北海道立近代美術館)出品をきっかけに、北海道での展覧会が多くなり、テンポラリースペース(札幌)、ギャラリーシーズ(旭川)での個展の他、「ソウル-札幌展」、「水脈の肖像」といった国際交流展に継続して出品。「水脈の肖像」では、実行委員を務めた。韓国国内の他、名古屋、福岡、長野、ドイツ、ロシアなどでのグループ展に出品。版画を中心とするが、その活動は平面作品に留まらず、コラージュ的な立体版画や、紙を用いたインスタレーションなど、版の概念を拡張するような試みを展開。

特徴

手漉きの紙を用いて型取りを行い、郵便物を模して仕上げられた作品。型取りによって立体的になっている部分は、紐で縛られた小包のようである。差出人には朴の名と作品名が、宛名は本作の寄贈者である版画家の荒井善則の名が記されている。本作は北海道立近代美術館にて2006年に開催された展覧会、「水脈の肖像'06」の出品作品。「水脈の肖像」シリーズは、1998年より韓国と北海道の作家の交流展として継続的に開催され、朴はこの展覧会の実行委員も務めている。それまでの交流の軌跡を象徴するように、同様の作品が5点制作され、北海道の作家に宛てられた。1993年の作例と同様に、人の手から手へと渡る郵便や小包といったモチーフは、空間を旅した痕跡として、空間の記憶を宿すものであろう。本作ではそうした象徴がより直接的になり、1960年代にフルクサスや具体美術協会などの現代美術団体を中心に流行した、メール・アートの様相をも呈しているといえる。

作家名	すなざわびっき	作品名	ごぜんさんじのがんぐ		
	砂澤ビッキ		午前3時の玩具		
	SUNAZAWA, Bikky				
生没年	1931-1989	作品名 補足			
出生地	北海道旭川市	制作年	1987年		
No Image		技法 材質	木彫		
		寸法	45.5×31.0×48.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	評価額	1,000,000	円

作家略歴

1931年、父・砂澤市太郎(アイヌ名トアカンノ)と母・ペラモンコロ(ベアモンコロ、ペラモンコロなど諸説あり)の子として北海道旭川市に生まれる。1953年、22歳の時に木彫を始め、モダンアート協会に所属し、読売アンデパンダン展などにも出展。阿寒湖畔と鎌倉市を往来しながら制作と発表を続ける。1959年、旭川市に戻り、北海道と東京を中心に多数の展覧会に出展。1978年には北海道中川郡音威子府村に移住し、廃校となった箴島小学校跡地をアトリエとする。1983年、北海道生活文化・スポーツ海外交流事業の派遣員としてカナダのブリティッシュ・コロンビアに3ヶ月間滞在し、作品を制作。1986年、札幌芸術の森野外美術館に野外彫刻《四つの風》を設置。1989年、骨髄がんにより逝去。

特徴

砂澤ビッキは1980年代後半に《四つの風》(1986年)や《風に聴く》(1987年)のようなモニュメンタルな大型彫刻を制作・発表するかたわら、深夜に「午前3時の玩具」と呼ばれる小品シリーズを制作した。1985年に試作第1号が作られ、1987年から翌年にかけて集中的に制作された。概して甲殻類や昆虫を連想させる架空の節足動物がかたちづくられ、関節部分は動かすことができる。当館ではすでに同シリーズの作品を4点収蔵している(いずれも1987年作)。また、本作のアイデアスケッチも収蔵しており、本作を収蔵することによってデッサンと実作品の比較も可能となる。

作家名	ほんだめいじ	作品名	〔ぼしぞう〕		
	本田明二		[母子像]		
	Honda, Meiji				
生没年	1919-1989	作品名 補足			
出生地	北海道月形町	制作年	1966年		
No Image		技法 材質	テラコッタ		
		寸法	76.0×45.0×33.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和4年度	エディション			
		号数	評価額	1,500,000 円	

作家略歴

1919年、北海道月形村(現・月形町)に生まれる。2歳で札幌市に転居。札幌第二中学校(現・北海道札幌西高等学校)卒業後、上京し、木彫家澤田政廣に師事する。1943年、第6回文展に初入選するが、翌年召集を受ける。終戦後3年間のシベリア抑留生活を経て復員し、札幌に居を構え、創作活動を再開する。1949年に新制作協会展(新制作展)に初入選し、出品を重ね、1965年に会員となる。全道美術協会展(全道展)では1951年に初出品で会員となり、1953年に事務局長に就任した。

同じ札幌第二中学校の先輩であり、新制作展の彫刻部の創立会員でもある本郷新とは公私ともに親交を持つ。1970年には旭川市常磐公園の《風雪の群像》を共同制作した。また、1971年、本郷新、佐藤忠良、山内壯夫とともに、札幌市南区の五輪橋に札幌オリンピック大会記念像を制作・設置している。そのほか、旭川市の《スタルヒンよ永遠に》など北海道内を中心に野外彫刻を多数手がけた。

1981年に開館した本郷新記念札幌彫刻美術館の理事に就任し、本郷の遺志を受け美術館運営に尽力した。1986年、北海道文化賞受賞。1989年、69歳で逝去。

特徴

本作は活動の比較的初期、1950年代から制作していた母子像の系譜に位置する。本作の制作年である1966年にテラコッタ18点を出品した個展を札幌・大丸ギャラリーで開催しており、同展出品のものと推測される。また同年作の石膏の母子像が本田明二アトリエに存在していたことが確認されている。当館では既に11点の作品(うち1点は野外美術館作品)を所蔵しているが、テラコッタ作品は1965年の《少女》のみ、母子像のシリーズは無い。多様な素材で制作を行った本田の大型のテラコッタの作例として、また母子像の作品として、コレクションの充実に寄与しうる貴重な作品と思われる。

本郷新が1965年春香山にアトリエを建てた頃、本田も本郷のアトリエにある灯油窯を利用し、テラコッタ制作に熱中した。窯のサイズから小品が中心だったようだが、本作に継ぎ目が見られることから、分けて焼成したのち接着したものと推測される。1965年の作品《座る裸婦》にも同様の継ぎ目が見られ、また座像というモチーフにも類似性が見て取れる。

作家名	ふじかわそうぞう	作品名	よこたわるらふ 2		
	藤川叢三		横たわる裸婦 2		
	FUJIKAWA, Sozo				
生没年	1922-1998	作品名 補足			
出生地	北海道旭川市	制作年	1963 年頃		
No Image		技法 材質	ブロンズ		
		寸法	18.5×34.5×15.0cm		
取得方法	寄贈	エディション			
選定年度	令和4年度	号数	評価額	500,000	円

作家略歴

1922年、北海道旭川市生まれ。本名基。東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科にて、朝倉文夫、加藤顕清らに師事。卒業後、北海道に戻り煉瓦会社などに務めるかたわら作陶やテラコッタによる彫刻制作を続ける。1951年からは、北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)の教官となり、1985年の退官まで北海道における数少ない彫刻指導の場として多くの卒業生を送り出した。

1952年から10年間にわたり日展に出品し、1955年に会員となった北海道美術協会(道展)においては、坂垣道、板津邦夫らとともに彫刻の指導的役割を果たした。1962年から1964年にかけて、文部省在外研究員としてイタリア・ミラノのブレラ美術アカデミーに留学し、マリノ・マリーニに師事したことは、それまでのアカデミックな作風から離脱する彼の大きな転機となっている。古代の原初的生命感を導入としたイタリアの新しい具象彫刻を直に学んだ藤川存在は、戦後の北海道彫刻に新鮮な息吹を伝えたと言えるだろう。

特徴

体を横にした裸婦がうずくまるように膝を曲げている。「横たわる裸婦」はこの時期にいくつか制作された主題であり、イタリア留学中の作品と思われる。同時期に制作された《横たわる裸婦 1》(1963年頃、中原悌二郎記念旭川市彫刻美術館蔵)は、簡略化されたフォルムで手の跡が残る抽象的な作品であるのに対し、本作は手や足、顔、胴体などが作りこまれ、より写実の要素が盛り込まれた。主題を限定して試行錯誤している様子がうかがえ、従来のアカデミズム様式とマリノ・マリーニから学んだ奔放さとのあいだで自らの着地点を模索していた時期の作例といえるだろう。帰国後は5回にわたって東京で個展を開催しており(第4回までは同内容を札幌でも開催)、本作は第1回藤川叢三展(1965年、資生堂ギャラリー)に出品。

作家名	ふじかわそうぞう	作品名	らふ1		
	藤川叢三		裸婦 1		
	FUJIKAWA, Sozo				
生没年	1922-1998	作品名 補足			
出生地	北海道旭川市	制作年	1970 年		
No Image		技法 材質	ブロンズ		
		寸法	53.0×30.5×34.0cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和 4 年度	エディション			
		号数	評価額	800,000	円

作家略歴

1922 年、北海道旭川市生まれ。本名基。東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科にて、朝倉文夫、加藤顕清らに師事。卒業後、北海道に戻り煉瓦会社などに務めるかたわら作陶やテラコッタによる彫刻制作を続ける。1951 年からは、北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)の教官となり、1985 年の退官まで北海道における数少ない彫刻指導の場として多くの卒業生を送り出した。

1952 年から 10 年間にわたり日展に出品し、1955 年に会員となった北海道美術協会(道展)においては、坂垣道、板津邦夫らとともに彫刻の指導的役割を果たした。1962 年から 1964 年にかけて、文部省在外研究員としてイタリア・ミラノのブレラ美術アカデミーに留学し、マリノ・マリーニに師事したことは、それまでのアカデミックな作風から離脱する彼の大きな転機となっている。古代の原初的生命感を導入としたイタリアの新しい具象彫刻を直に学んだ藤川存在は、戦後の北海道彫刻に新鮮な息吹を伝えたと言えるだろう。

特徴

片足をあげ、靴下を脱ぐために身をかがめる女性は、何かに気づいたかのようにふと顔を上げて前を見据えている。日常生活の何気ない仕草を的確にとらえ、おおらかに表現している。1964 年に帰国してからは、脱衣の裸婦像を多く手掛けており、本作はその時期に制作されたもので、帰国後の一つの到達点とみることができる。当館で所蔵している《立像 7》(1967 年)と比較すると、人物はより動的なポージングとなり、かつなめらかな仕上がりとなっている。留学以前は日展で主流の端正なフォルムに取り組んでいたが、イタリアでのマリノ・マリーニの指導を受けて、大胆なデフォルメやマチエールの工夫が試みられた。帰国後は 5 回にわたって東京で個展を開催しており(第 4 回までは同内容を札幌でも開催)、本作は第 3 回藤川叢三展(1970 年、資生堂ギャラリー)に出品。

作家名	ふじかわそうぞう	作品名	とうぶ		
	藤川叢三		頭部		
	FUJIKAWA, Sozo				
生没年	1922-1998	作品名 補足			
出生地	北海道旭川市	制作年	1978年		
No Image		技法 材質	石膏		
		寸法	34.7×30.0×36.5cm		
		取得方法	寄贈		
選定年度	令和4年度	エディション			
		号数	評価額	600,000	円

作家略歴

1922年、北海道旭川市生まれ。本名基。東京美術学校(現・東京藝術大学)彫刻科にて、朝倉文夫、加藤顕清らに師事。卒業後、北海道に戻り煉瓦会社などに務めるかわら作陶やテラコッタによる彫刻制作を続ける。1951年からは、北海道学芸大学札幌分校(現・北海道教育大学札幌校)の教官となり、1985年の退官まで北海道における数少ない彫刻指導の場として多くの卒業生を送り出した。

1952年から10年間にわたり日展に出品し、1955年に会員となった北海道美術協会(道展)においては、坂垣道、板津邦夫らとともに彫刻の指導的役割を果たした。1962年から1964年にかけて、文部省在外研究員としてイタリア・ミラノのブレラ美術アカデミーに留学し、マリノ・マリーニに師事したことは、それまでのアカデミックな作風から離脱する彼の大きな転機となっている。古代の原初的生命感を導入としたイタリアの新しい具象彫刻を直に学んだ藤川の存在は、戦後の北海道彫刻に新鮮な息吹を伝えたと言えるだろう。

特徴

身を乗り出したような女性の頭像。1970年代中頃から、それまでの作品において特徴的だった、つり目で大胆にデフォルメされた人体とは違った、写実的な人物像をいくつか制作している。ちょうどこの時期はテラコッタやリトグラフにも取り組み始め、新たな制作を試みるのと同時に、対象を忠実に写し取るという姿勢に立ち返ったとも考えられる。第2回北海道現代美術展(1979年、北海道立近代美術館)出品。